

平成二十六年 国文学専攻研修旅行（万葉旅行）報告

神 谷 碧

はじめに

初日（鳥羽）

平成二十六年度の研修旅行は、九月十七日～十九日の日程で鳥羽・伊勢・尾張を巡った。平成二十五年、伊勢神宮では二十一年に一度の式年遷宮が行われた。その翌年である平成二十六年は「おかげ年」に当たる。古来、式年遷宮の翌年の「おかげ年」に伊勢神宮に参拝すると特別なご利益があるという。その習慣にあやかり、伊勢神宮に参拝するとともに、古代の神話や信仰を肌で感ずるべく、研修旅行に臨んだ。

東京から四時間弱、新幹線と在来線を乗り継ぎ、JR鳥羽駅に着く。宿泊先の錦海楼に荷物を預けて、佐田浜港から遊覧船に乗った。万葉集の時代、大和の人々は伊勢・志摩の海に憧れを抱いていたのだろう。万葉第三期の歌人、安貴王は次のような歌を残している。

伊勢の海の 沖つ白波 花にもが 包みて妹が 家づとにせむ

（『万葉集』巻三・三〇六番歌、安貴王）
この日は天気恵まれ、船から眺める波頭の白さが目にまぶしく、安貴王の心躍りが伝わってくるようであった。

遊覧船のコースに従い、イルカ島でイルカのショーやイ

ルカタツチ等を楽しんだ後、ミキモト真珠島を見学した。ミキモト真珠島は、御木本幸吉が世界で初めて真珠の養殖に成功した島で、御木本幸吉の事績を記す御木本幸吉記念館や、真珠のできる仕組みや養殖の方法などを解説する真珠博物館がある。

伊勢の海の 海人の島津が 鰺玉 採りて後もか 恋の繁けむ

〔『万葉集』巻七・一三三二番歌、作者未詳〕と詠まれるように、万葉集の時代、真珠は「鰺玉」と呼ばれていた。現在、日本の養殖真珠のほとんどはアコヤガイを母貝としているそうだが、「鰺玉」というのもあわびだけでなく、アコヤガイ等の貝から採れる玉を総称していたらしい。

真珠島では、昔ながらの白い磯着の海女による潜水の実演を見ることが出来る。足をそろえてつま先を伸ばし、水面に対して垂直に潜っていく姿や、独特の呼吸法からなる「海女の磯笛」が印象的であった。

二日目（伊勢）

二日目は貸し切りバスで伊勢に向かう。途中、鳥羽展望台で鳥羽湾全体を眺望した。遙かな離島が霞んで見え、神

島らしき島もおぼろげながら見えたような気がする。神島は三島由紀夫の『潮騒』の舞台となった島で、「潮騒」の語は柿本人麻呂の歌に拠るのだという。

潮騒に 伊良虞の島辺 漕ぐ舟に 妹乗るらむか 荒き島廻を

〔『万葉集』巻一・四二番歌、柿本人麻呂〕この歌は持統天皇六年（六九二）の伊勢行幸に際して、行幸に従駕した女性を思い、都に残った人麻呂が詠んだ歌である。高台から眺望する海は穏やかで、「潮騒」を感じることは難しかったが、遠く離れた大和でこの歌を詠んだ人麻呂の表現力に改めて感嘆する思いであった。

再びバスに乗り、二見興玉神社に立ち寄った。「お伊勢参り」では二見浦で禊をした後、外宮・内宮の順で参拝するのが正式だとされている。その慣例に倣い、二見興玉神社に参拝するのである。

二見興玉神社は猿田彦大神を祭神とし、「夫婦岩」の風景で有名な神社である。夫婦岩は沖合六六〇メートルの海中にある「興玉神石」（猿田彦大神出現の神跡）の鳥居として注連縄が張られた岩である。晴天の下、海中に二つ並ぶ岩の厳かな風景には心ひかれるものがあつた。



夫婦岩

そして、いよいよ伊勢神宮に向かう。伊勢神宮は通称で、正式には神宮という。天照大御神を祀る皇大神宮（通称「内宮」）と、神饌を司る豊受大御神を祀る豊受大神宮（通称「外宮」）の二つの正宮から構成される。本来、慣例通り外宮から参拝したいところであったが、おかげ横丁で昼食をとる都合により、まず内宮に向かった。

内宮の祭祀の始まりは、日本書紀に次のように記されて

いる。

時に天照大神、倭姫命に誨へて曰はく、「是の神風の伊勢国は、則ち常世の浪の重浪帰する国なり。傍国の可怜し国なり。是の国に居らむと欲ふ」とのたまふ。故、大神の教の隨に、其の祠を伊勢国に立て、因りて斎宮を五十鈴川の上に興てたまふ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります処なり。

〔『日本書紀』垂仁天皇二十五年三月十日条〕

現在の内宮も五十鈴川のほとりにあり、鳥居をくぐって宇治橋を渡ると五十鈴川の清流が御手洗場となっている。正宮へ至る参道には白い砂利が敷き詰められ、綺麗に舗装されている。そこを歩いていく参拝客の列は途切れることがなかった。

式年遷宮で造営された正宮の新殿に辿り着くと、そこは檜の香に包まれていた。正宮は想像以上に素朴な雰囲気の本造建築だった。その建築様式は「唯一神明造り」と呼ばれ、弥生時代の穀倉に起源を持つとされている。一定の期間を置いて遷宮が行われる理由の一つには、このような神の住処を建てるための技術を後世に伝えるということがあるとも言われている。古代の日本人がどのような建物で生活していたのか、伊勢神宮の新殿は私達に教えてくれる。



内宮・正宮

内宮参拝の後、昼食をとるためにおかげ横丁に向かった。おかげ横丁とは平成五年の式年遷宮の年に開業した、内宮の門前町である。「お伊勢参り」が大流行した江戸期から明治期にかけての建築物が移築され、古い街並みの景観を再現している。飲食店や酒屋、出店などが立ち並び、赤福など伊勢の名産品が販売されていた。観光客で大変な賑わいを見せていたが、全体的に落ち着いた雰囲気を感じさせ

てくれるところだった。

昼食の後は、外宮に参拝してから、式年遷宮についての詳細を知ることのできる「せんぐう館」を見学した。ここで、式年遷宮について記しておきたい。

式年遷宮とは、伊勢神宮などの神社で何十年かに一度、新殿を造営し、旧殿から御神体を遷すという祭祀のことである。伊勢神宮の式年遷宮は国内でも最大規模を誇り、その第一回は持統天皇四年（六九〇）に行われ、平成二十五年の式年遷宮は第六十二回のものである。

以下に、実際に行われた「式年遷宮」の流れを簡単に見て行こう。

【遷宮の開始を告げる】（二〇〇五年五月）

- ・ 山口祭……御杣山（遷宮の用材を伐採する山）で、遷宮の開始を告げる祭儀。

- ・ 御杣始祭……御杣山で用材の伐採を行う。

- ・ 御樋代木奉曳式……遷宮の際に御形（御神体）を納める「御樋代」の用材を運ぶ。

式年遷宮では各作業を開始する前に必ずと言っていいほど、神に祈り、供物を奉げる。これは各儀式で「神からの災厄を回避する」という目的があるからである。日本の神は八百万の神であり、崇り神でもある。山の

神、木の神、川の神など、御饌や御酒を捧げて機嫌を窺っておかなければ、神に崇られてしまう。右のような、式年遷宮の各儀式はこのような神々のために行われる。

【檜の伐採・運搬】（二〇〇六年四月）

- ・ 木造始祭……造宮の起工式。伊勢神宮にて行われる。
- ・ 御木曳行事……木材を伊勢神宮に曳き入れる祭祀。

新殿造宮に使用される木材は、五十鈴川から「神領民」の手で運ばれる。「神領民」は伊勢の人々であり、伊勢神宮への信仰心も厚く、「式年遷宮は自分達の手により行われている」という自覚を持っていたという。現代の「神領民」は伊勢の住民とは限らず、全国の人々が「神領民」として御木曳に参加することができるそう。

【女性为中心的役割を担う儀式】（二〇〇八年四月）

- ・ 鎮地祭……一般の地鎮祭に当たる。主宰者は「物忌の童女」である。その奉仕により神々の加護を得て、新殿の安泰が保障される。

- ・ 宇治橋渡始式……遷宮の際は橋も架け替える。最初に橋を渡るのが「渡女」という女性である。神域と

俗世の境界にある宇治橋を渡り、神と人とを結びつける役割を担う。

内宮の祭神・天照大御神は女性神であるが、式年遷宮においても、右のように女性为中心的な役割を担う儀式がある。

【新殿造宮の本格化と遷御】（二〇一三年三月）

- ・ 立柱祭……造宮に関わる儀式の中でも特に重要な儀式。新殿の建築の初めに柱を立てるというもの。これ以前に新殿の床下に「心御柱」を埋める「木本祭」（二〇〇五年五月）も行われており、遷宮では柱が大きなテーマとなっている。

- ・ 遷御の儀……新殿の完成後（二〇一三年七月）、ようやく「遷御の儀」となる。

一〇月二日、全ての準備が整った日の深夜に御形が新殿に運ばれる。

- ・ 大御饌……遷御の翌朝、新穀を神に奉げ、御神楽・幣帛を奉納する。

以上、長い年月をかけて、約三十近くの儀式が執り行われている。式年遷宮は古代から「国家の大事業」であったといえるだろう。

そして、この日の最後の見学地として伊勢市立伊勢古市参宮街道資料館に行き、館長の世古富保先生からお話を伺うことができた。古市は伊勢参宮を済ませた人々の精進落としての場として、江戸の吉原、京の島原と並ぶ三大遊廓の一つに数えられた。近松門左衛門の浄瑠璃で有名な「女殺油地獄」は、この地の妓楼・油屋でおこった殺傷事件「油屋騒動」に取材したものだという。また、当地で行われた伊勢歌舞伎は、かつての松本幸四郎・尾上菊五郎らが来訪するなど役者の登竜門といわれたそうだ。

二見浦の禊ぎで身を清め、門前町を楽しみ、外宮・内宮に参拝して、最後に精進落としをするという「お伊勢参り」の経路を駆け足で辿った一日であった。

三日目（尾張）

昨夜のうちに電車で名古屋市内に移動し、三日目も貸し切りバスで見学地を廻った。

まずは日本武尊の墓と伝えられる白鳥古墳と、その妃である宮簀媛の墓とされる断夫山古墳を見学した。しかし、季節柄、藪蚊も多く、東京の代々木公園で発生した Dengue 熱が蚊によって感染することを思い出し、早々に退散してしまった。今にして思えば残念である。

次に、三種の神器の一つである草薙剣を祀る熱田神宮に向かった。熱田神宮の祭祀の起源は、日本尊が東征の帰路に尾張の宮簀媛と結婚し、草薙剣を宮簀媛の許に預けたまま伊吹山の神に向かい、山の神の毒氣にあたって亡くなったため、宮簀媛が熱田に草薙剣を奉斎したことに始まるとされている。

最後の見学地は蓬左文庫である。蓬左文庫は尾張徳川家の旧蔵書を所蔵する公開文庫である。「蓬左」とは、熱田神宮を「蓬萊宮」と称したところから、それに向かって左（＝北）を指す。実際には、熱田から名古屋城のある辺りにかけての地域を言う。ここでも当地における熱田神宮の重要性を知る思いであった。また、神話・伝承の世界から文献の世界に戻ったようで、その対比が印象的でもあった。

おわりに

今回の万葉旅行の中心は、式年遷宮を念頭に置いて伊勢神宮を訪れるところにあったが、上代文学に留まらず、色々な角度から伊勢とその周辺の土地を観察することができ、私にとって大変興味深いものとなった。

そして、私だけでなく、万葉旅行に参加した学部生の皆さんが、この研修旅行を経て日本文学・日本文化の研究に

より関心を深めてくれることを祈念している。

（かみや みどり・実践女子大学院文学研究科
国文学専攻博士前期課程二年）